

出席確認の呼名に対して、教室内の生徒・教師が聞こえる大きさの声で返事をすることができる。

# 指導目標

## 【長期目標】

朝の会等の司会の際、教室内の人に聞こえる大きさの声で会を進めることができる。

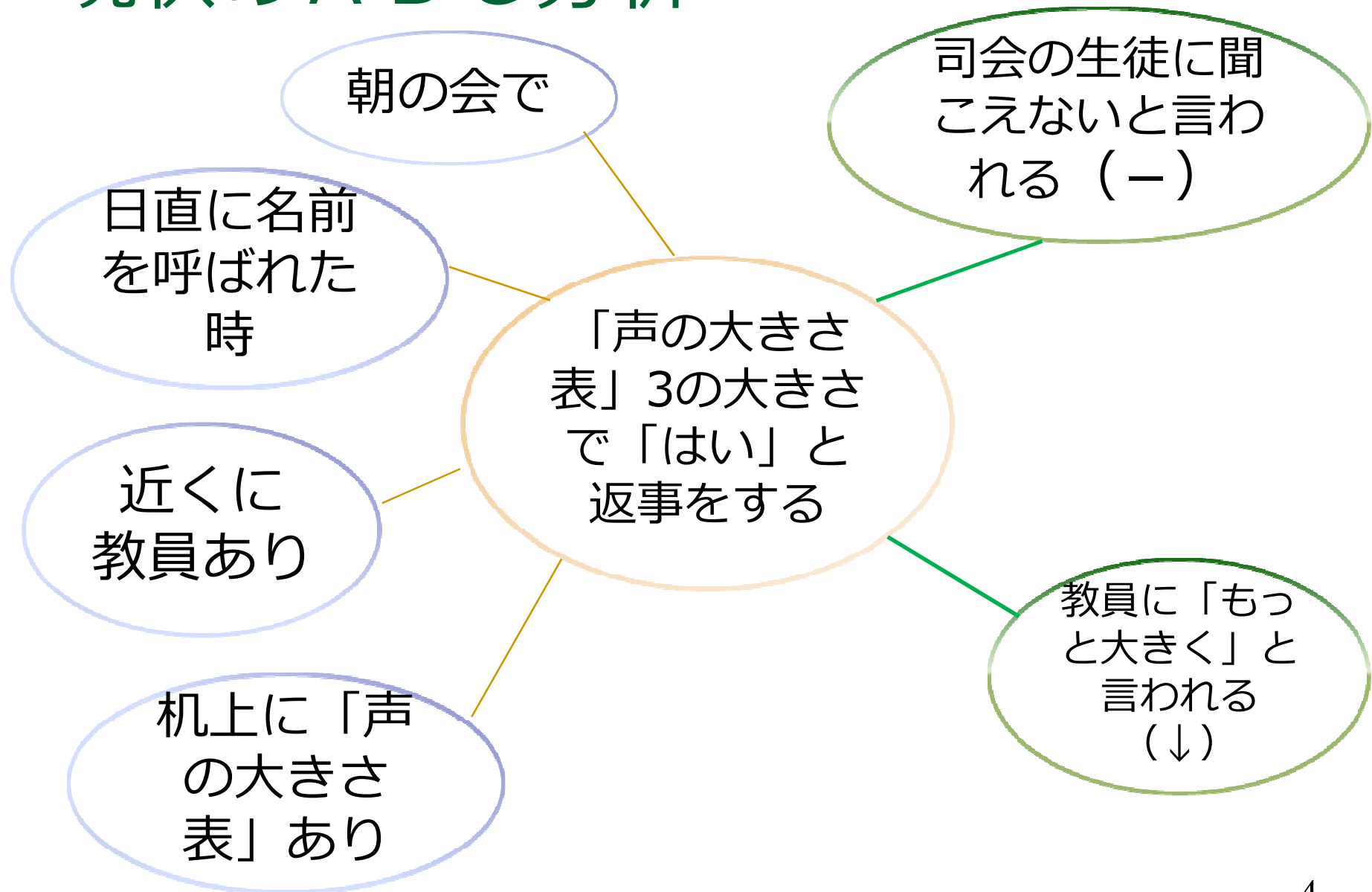
## 【短期目標】

教室外での活動時、他クラスの生徒の呼名に対して大きな声で返事をするすることができる。

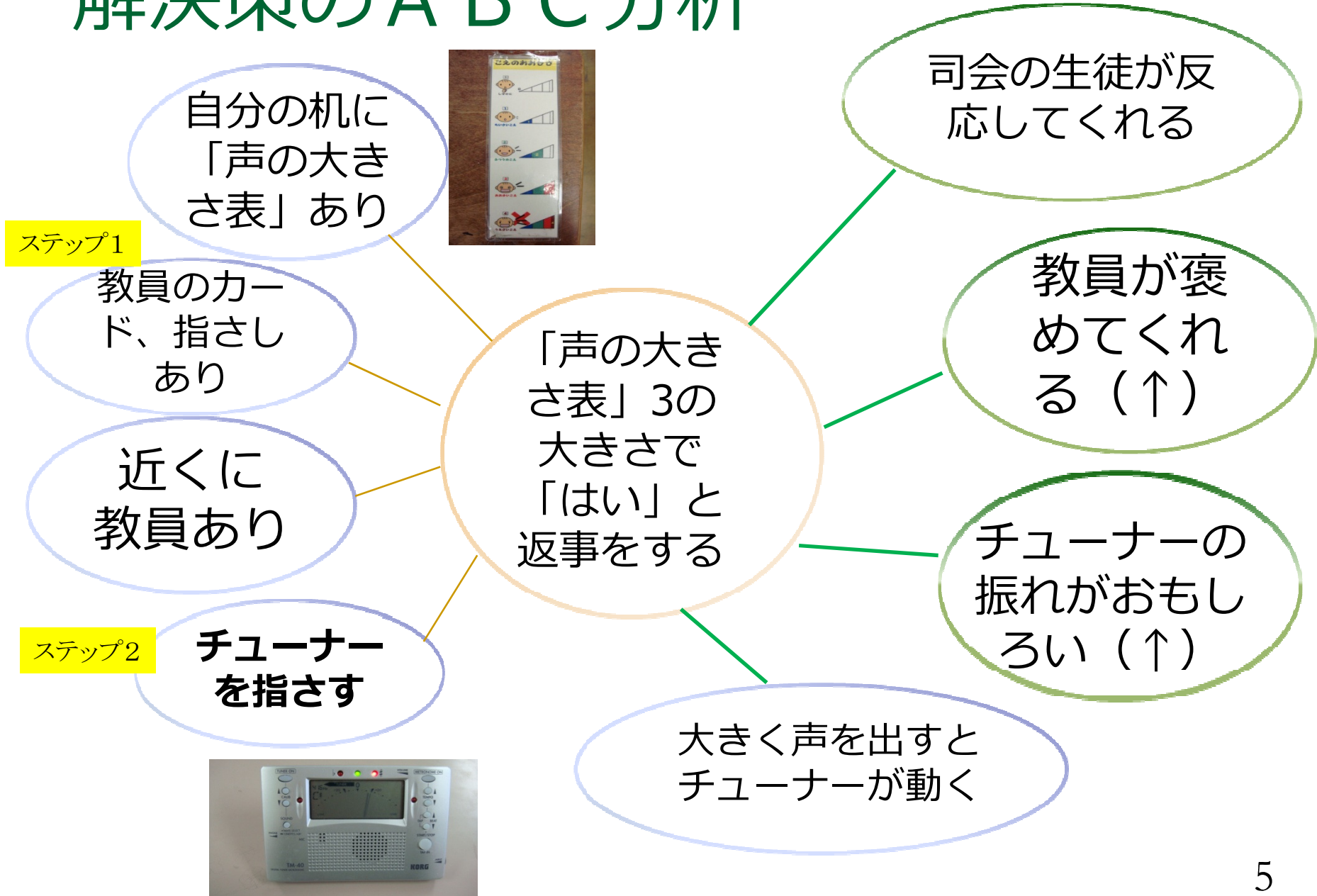
# 標的行動

- 朝の会の出席確認の呼名に、教室内の生徒・教師が聞こえる声で返事をする事ができる。

# 現状のA B C分析



# 解決策のABC分析



# 方法

## 【対象児】

A児（支援学校中学部 1年生 女児）

知的障害

S - M社会生活能力検査

（生活年齢 13-2, 社会生活年齢 9-3）

身辺自立12 - 6以上      移動 8 - 4

作業 9 - 6      意思交換 7 - 8

集団参加 7 - 1 1      自己統制 1 2 - 2

## 【指導場面】

朝の会

## 【般化場面】

自立活動の時間に他クラスの生徒に呼名されて大きな声で返事をする。

## 【教材】

チューナー

# 手続き（1）

## 【ベースライン】

朝の会の時間、司会の生徒に呼ばれて返事をするの自分の声の大きさを「声の大きさ表」で評定する。

## 【ステップ1】指導者（担任1）のみが行う。

司会の生徒に呼名されて返事をする前に、教員が机上の「声の大きさ表」の3を指さす。



# 手続き（２）

【ステップ２】指導者（担任１）のみが行う。

自分の声の大きさが、目で見えてわかるようにチューナーを机上に置く。

+

呼名前にチューナーの針の部分を指さす。

【般化】指導者（担任２）が行う。

自立活動のグループ別の活動時に指導。

手続きはステップ２と同じ。

# 記録方法

- 「声の大きさ表」を目安として、返事の音量を点数化して記録をとる。

3点：「声の大きさ3」で返事ができた。

2点：チューナーを見ながら大きな声で返事をした。

1点：チューナーの指さしで大きな声で返事をした。

0点：呼名に対して大きな声が出なかった。

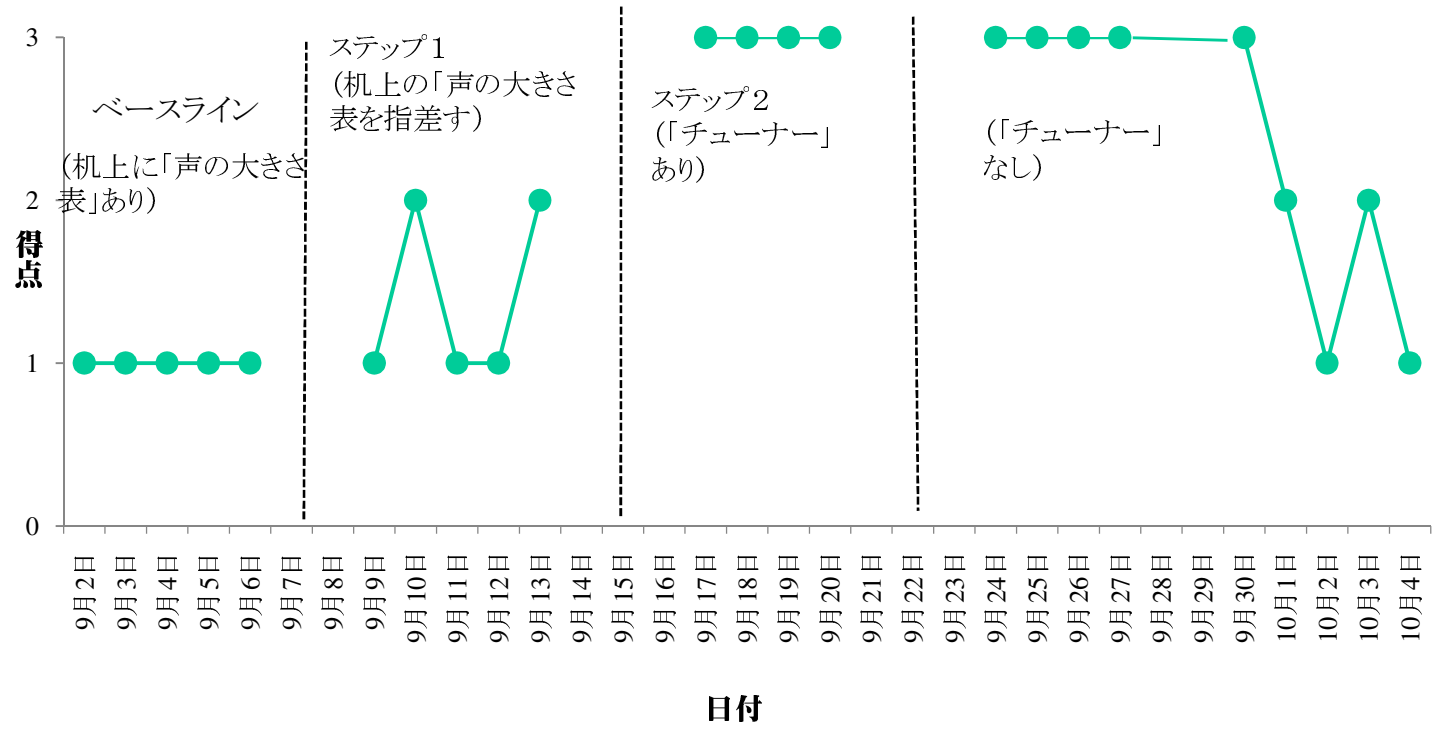


図1. 自発的に音量3の声の大きさに返事できたかどうか

# 達成基準・中止基準

- 達成基準

- 3点が3回連続

- 中止基準

- 0点が5回連続

## 結果（2）

- ベースラインでは「大きな声で返事をする」という行動が自発しなかった。
- ステップ1では、「声の大きさ表」を指さしても「大きな声で返事をする」という行動が自発しなかった。
- ステップ2では、標的行動がみられるようになった。
- 般化場面では、担任2がステップ2の手続きで指導を行った。1回目から標的行動ができ般化が確認された。

# 考察（1）

- 教材教具は、数回使用すると一定以上の効果は得られなかった。
  - 視覚的にわかりやすい教材教具の精選。
  - A児にとって強い好子となる物を適宜、変えていく必要があった。
  
- 腹が立った時や男性教師に話しかける際には、大きな声が出ていた。振り返りの際、教師との関わりが多かった時間が「楽しかった」と記入していた。
  - 話す機会を多くし、A児が楽しく話せる場面を設定する。
  - 相手にしっかり聞こえる声で話せた時には、大いに褒める。

# 考察（2）

## 今後の課題

- 場面によって声の大きさが視覚的にわかるよう情報機器を活用して指導していく。
- 正しい呼吸法や発声方法をゲーム的に行い、楽しく練習したり、大きな声で話すと褒められる場面設定をする必要がある。
- 社会生活を送る上で、大きな声を出す必要がある場面をA児と共に確認したが、小さな声で話す方が良いとされる場面が多かった。
- 場面に合わせて声の大きさを調節しながら話せるようにすることが必要であった。